

車引 (五諸車引哉袖褙)

へ色香争う車引 酒の機嫌かほんのりと 顔は桜になる目元 笑い
上戸の梅にはかえて 味に拗ねたる松の癖 へアリアアリアコリヤコリヤ
三人で 二升三升五諸車 ざれがかうじてメリメリメリ へ影をの
み見交はずばかり つれなきと源氏の文を繰り返し 御簾の追い風
恋車 酒がこうじて喧嘩の種よサ 扱いになりましたしゅんしゅん
しゅんと執りなり可愛らし へ摘み草やほんの嫁菜の姉妹が 思ひ
思ひの料理草 へ古来希なる七十の賀の祝とて 昨夜から雑煮の仕
度 提灯でもちつと精出せ合点じゃ へ梅の殿振り木振りも粹な
殿御待つ身と春告草と こちは遣る瀬がないわいな へ八重に櫻の仇
名草 床し床しの積もりて雪の へ松の操を立て通し 変わらぬ縁の
千代見草 へ米かす味噌摺りガラガラガラ 女同士の水仕事 へこ
れも面白鹿島へ へ御代は目出たのナアエこれわいな 若松様よオ
ヤモサ オヤモサ へ鹿島浦にはナアエこれわい おいとまごいのカン
鹿島 へオーエンヤリヨウ へ濡れて見よかし目せき笠 へ恋の言葉
を傘によそへていをうなら 濡れてしつぱり心のたけを 割つて轆轤の
縁しさへ へいとしいとしいと焦がれてそして 晴れて青紙染しみに いつ
かは君が軒の妻 それも誓ひし神さんの 結ぶ縁じゃないかいな 睦
ましや へ袖をつらねて萬客の 夜毎に引かれ車引 評判吉原栄え
ける